



地 域 で 取 り 組 む

ごみ減量 たねまき BOOK

～ 地域ごみ減量推進会議 取組紹介レポート ～



山内 寛

(京都市ごみ減量推進会議 地域活動実行委員会 委員長)



地域ごみ減量推進会議の皆様には、日々、ごみ減量活動に取り組んでいただいておりますことに感謝申し上げます。

京都市ごみ減量推進会議は、平成8年11月の設立から今年で16年目を迎えますが、これまでの間、私が委員長を務める地域活動実行委員会が中心となり、地域ごみ減量推進会議を、文字通り、地域のごみ減量推進において中心的な役割を担う組織と位置付け、皆様とともに手を携えて活動に取り組んでまいりました。

平成8年度に3団体からスタートした地域ごみ減量推進会議ですが、地域の皆様やエコまちステーションの方々のご理解とご協力により、今や150余りを数えるまでになりました。

日頃、皆様には、地域において使用済てんぷら油の回収をはじめ、環境施設見学会や環境問題等に関する学習会の実施、フリー

マーケットやバザーの開催、リユース食器の活用等による地域イベントのエコ化、落ち葉等のたい肥化活動など、実に様々な取組を行っていただいております。

しかしながら、その一方で

「他の地域ごみ減量推進会議はどんな活動をしているのだろうか?」

「具体的にどんな活動をしたらいいかわからない!」

といった声を耳にすることもあります。

こうしたことから、今回、地域で取り組まれている活動の様子等をご紹介するため本冊子を作成しました。これにより、皆様の疑問にお答えできればと考えますし、また、皆様のごみ減量やリサイクル等の活動に取り組まれるにあたり、参考になれば幸いです。

紙面に限りがあり、すべての取組を紹介することはできませんでしたが、他の地域ごみ減量推進会議でもさまざまな取組を進めていただいております。今回、紹介できなかった、左京区、東山区、南区、西京区の取組につきましても、また別の機会に御紹介していきたいと思っております。

京都市のごみを減らし、環境を大切にしたいまちと暮らしの実現に向けて、力を合わせて取り組もうではありませんか!

■ ごあいさつ	p01
■ 地域ごみ減に期待すること	p03
■ 京都市ごみ減量推進会議について	p05
■ ごみの現状	p06
■ 地域ごみ減量推進会議について	p07
■ 地域の取組事例	
「資源物回収」	p09
■ 山階学区地域ごみ減量推進会議 (山科区)	
■ 有隣学区ごみ減量推進会議 (下京区)	
「イベントのエコ化」	p11
■ 藤城学区地域ごみ減量推進会議 (伏見区)	
■ 梅逕安心安全ネットワークごみ減量推進会議 (下京区)	
「落ち葉堆肥がつなぐ地域のコミュニケーション」	p13
■ 朱雀第六学区地域ごみ減量推進会議 (中京区)	
■ 朱雀第四学区地域ごみ減量推進会議 (中京区)	
「環境学習」	p15
■ 醍醐西地域ごみ減量推進会議 (伏見区)	
■ 室町地域ごみ減量推進会議 (上京区)	
「区単位での取組」	p17
■ 北区地域ごみ減量推進会議 (山本玉幸会長)	
■ 右京区地域ごみ減量推進会議 (菊池初江会長)	
■ 伏見区地域ごみ減量推進会議 (村瀬克子会長)	
■ まとめ	p19
■ よくあるご質問	p21
■ 助成金の活用方法について	p22

インタビュー

『いま、地域ごみ減量推進会議に望むこと』

京都市ごみ減量推進会議会長 高月 紘（京都大学名誉教授、京エコロジーセンター館長）



研究者、また漫画家として、ごみ問題に取り組み、京都市ごみ減量推進会議の発足当初から 15 年以上に渡り、会長として京都市ごみ減量推進会議に深く関わってこられた高月紘会長に、地域ごみ減量推進会議への期待や展望についてお話を伺いました。

京都市ごみ減量推進会議と地域ごみ減量推進会議の特徴とは？

京都市ごみ減量推進会議（以下、市ごみ減）は、行政（京都市）が中心となってごみの減量を押し進めるのではなく、市民や NPO、事業者、そして行政が立場を越えて、自分たちの手でごみを減らそう！という目標を掲げ、設立されました。この提案は、同志社大学経済学部くんしまの郡嶋教授によって示され、立ち上げ当初から、会員制、つま

り皆でお金を出し合って、自分たちのごみの減量に取組むという、全国的にも例がない、京都が誇る先進事例の一つとなりました。

その中でも、地域ごみ減量推進会議（以下、地域ごみ減）は、市民により自主的に組織された団体であり、市ごみ減とともにこのような組織が全国的に広がることを期待しています。

平成23年10月に開催された「3 R 推進全国大会 in Kyoto」において、地域ごみ減の活動内容や活動への思いを展示し、市内外に発信したのは、このような思いがあったからです。

地域ごみ減量推進会議の立上げの際、印象に残っていることは？

「机上の議論よりも実践が大切です!」。市ごみ減の設立以前から、熱心に環境問題に取り組んでおられた日本主婦連合会の伊藤さかえ会長の言葉が、今でも印象に残っています。ごみ問題の解決の糸口は、一人ひとりの暮らしの中にあります。地域ごみ減の活動は、常に暮らしの中での実践を大切にし、地域の課題に沿った活動に力を入れているため、市内外からも高く評価をされています。ごみ問題は、市民一人ひとりの問題である、という認識が広がったのも、地域ごみ減の活動の大きな成果だと思います。

地域ごみ減だからこそ、できることは？

地域ごみ減では、これまで使用済てんぷら油などの資源物回収が中心でしたが、最近では、環境に配慮したイベントや環境学習会を行うなど、その地域の特色を活かした環境活動も増えてきました。様々な立場や世代の人々を結びつけ、地域が一丸となって環境に良い暮らしを実現する、これが地域に根差した組織である地域ごみ減だからこそできる取組であり、ごみ減が目指すパートナーシップの一つの姿なのです。

行政との連携に望むことは？

平成22年4月に各区役所・支所に開設された「エコまちステーション」との連携も重要です。エコまちステーションは、ごみの分別相談や、防鳥用ネット（カラスネット）の貸出、また資源物回収の拠点として多くの市民に利用されています。また、地域のお祭りなどでごみの減量・分別の啓発活動や、小学校での環境授業なども積極的に行っており、地域ごみ減の活動をサポートする役割も担っています。互いに連携を深めることで、地域の声が行政に反映され、よりきめ細かな環境行政サービスにつながるのではないのでしょうか。

助成制度の活用について

いざ、地域での活動を広げようとする、まずはそのための資金が必要になります。資金不足のために、地域のやる気を実現できないのはもったいない、そんな時はぜひ地域の環境活動を応援する助成制度を活用して下さい※。例えば、ごみ減では市民の皆さんの環境活動を支援する

ために、毎年、『市民公募型パートナーシップ事業※』を実施し、より幅広い、先進的な取組をサポートしています。より良い地域づくり、そして「人づくり」に積極的に活かして欲しいと思います。

地域ごみ減の今後について

長年にわたる地域ごみ減の活動によって、使用済てんぷら油の回収事業は一定の成果を得ることができました。今後、更に地域でのごみ減量活動を活発化させ、環境意識を向上させるためには、皆でアイデアを出し合い、より多様なごみ減量・環境活動に取り組み、より多くの市民を巻き込むための仕組み作りが求められます。若い世代、特に子どもたちとの繋がりを密にしながら、地域の美化や安全、健康、そして生き甲斐作りなどの活動とも連携し、「自分たちの地域の在り方」について大きな視点で捉えていくことが大切になってくるでしょう。

京都市ほど、市民活動が盛んな都市はありません。ぜひ自信をもって自分たちの活動の成果を、積極的に発信して欲しいと思います。多くの人々から注目を集めることが、活動そのものの原動力となり、そのエネルギーが地域の活性化に繋がることを信じています。



※ 助成制度については、P22 をご覧ください

京都市ごみ減量推進会議とは

1 概要

「市民・事業者・京都市が、その立場を超え、力を合わせてごみを減らす」、まさにこれを具現化した団体が、京都市ごみ減量推進会議（以下「京都市ごみ減」）です。

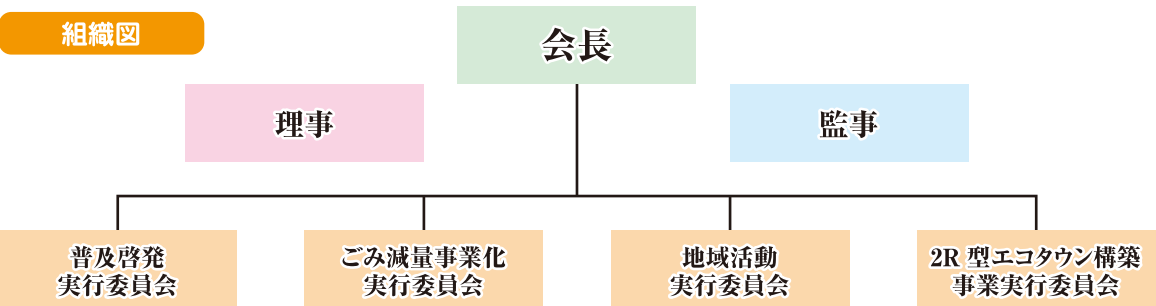
京都市ごみ減は平成 8 年 11 月に発足しました。

地域ごみ減量推進会議をはじめ、市民団体や企業・事業者団体、行政（京都市）などが会員となり、自発性とパートナーシップを基本に、ごみ減量の推進に向け、様々な取組を進めています。



2 組織

会長：高月紘（京都大学名誉教授・京エコロジーセンター館長）



3 実行委員会の事業

①普及啓発実行委員会

会報誌、ホームページによる情報発信、企業向けごみ減量実践講座の開催、市民公募型パートナーシップ事業（事業への助成）、こどもワークショップなど

②ごみ減量事業化実行委員会

再生紙の利用促進（学校給食用の牛乳パックを再生した「めぐレットペーパー」の普及促進）、企業等から排出される秘密書類のリサイクル事業、市役所前広場でのフリーマーケットの開催

③地域活動実行委員会

「地域ごみ減」の設立促進や、地域ごみ減が実施するごみ減量活動や環境学習会等への支援（助成金の支出）、行政区単位でのごみ減量活動支援等

④2R 型エコタウン構築事業実行委員会

リペア・リメイク情報発信（「もっぺん」サイトの運営等）、エコ商店街の実現、容器や包装削減の推進、リユース容器システムの拡充等

ごみの現状

ごみとは何か

ごみを簡単に表現すると「いらなくなったもの」になります。でも、生活するうえではじめからいらないものなんてありません。ごみになったものも、もとは生活するうえで必要なものだったはずです。

そう、ごみの元は、資源なのです。ごみを減らすことは資源を大事に使うこと。

持続可能な社会を実現するためにも、ごみについて考えることが重要です。

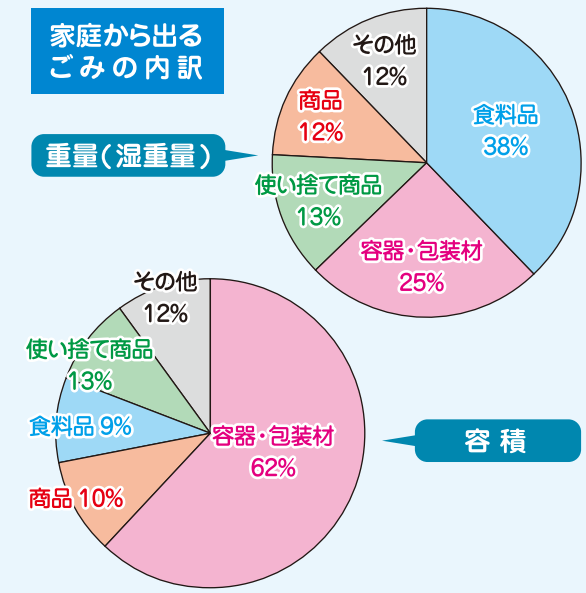
わたしたちはどれだけのごみを出している？

わたしたちは生活のなかで、どれだけのごみを出しているのでしょうか。京都市のクリーンセンターなどのごみ処理施設・リサイクル施設では、1 年間に約 50 万トン（平成 22 年度）のごみを受け入れています。このごみは、家庭からのごみや、オフィスや商店などからのごみが含まれていますが、これは京都市民が一人一日 924g のごみを出している計算になります。ピークは、平成 12 年の約 82 万トンでした。その頃から比べると、約 40% は削減されていますが、循環型社会、持続可能な社会を目指すにはさらにごみを減らしていく必要があります。

また、工場や建設現場などから出る産業廃棄物は、京都市内だけでも 1 年間に約 272 万トン（平成 22 年度）発生しています。これら産業廃棄物は企業が排出しているものですが、我々の生活を支えるために発生しているごみであることには変わりありません。そう考えると、京都市民が一人一日に出しているごみは、さらに多くなります。

ごみの中身はこんなかんじ

家庭から直接出るごみの内訳は、重量では「生ごみなどの食料品」が約 4 割、容積では「容器・包装材」が約 6 割となっています。ごみ減量考えたとき、この 2 種類のごみをいかにへらしていくかが重要です。



ごみを減らすキーワード、3R と 2R

「3R」は Reduce (リデュース・発生抑制)・Reuse (リユース・再使用)・Recycle (リサイクル・再利用) の 3 つの言葉の頭文字をとったものです。どれもごみ減量のために大切な行動ですが、リサイクルは多くのエネルギーや資源が必要で、どうしてもごみがでてしまったときの最後の手段としたほうがよさそうです。そ

こで、この 3R の中でも特に最初の 2 つの R、すなわち「発生抑制」と「リユース」を進めていくことが大切だと考えられます。例えば「食品廃棄物をリサイクルする前にまずできるだけ発生しないようにする」「何度も使える容器や包装を選択し、使い捨てを減らす」といったライフスタイルを進めていく必要があります。

みんなで手を取りあい、ごみ減量をすすめ、持続可能な社会を実現しましょう！

地域ごみ減量推進会議とは

地域ごみ減量推進会議（以下「地域ごみ減」）は、文字どおり、「地域」の力を結集して「ごみ減量」活動を「推進」している組織です。

効果的にごみ減量を進めるためには、地域ごみ減をはじめとした地域住民の皆さんや事業者、行政（京都市）の三者が一体となって取り組むことが重要です。

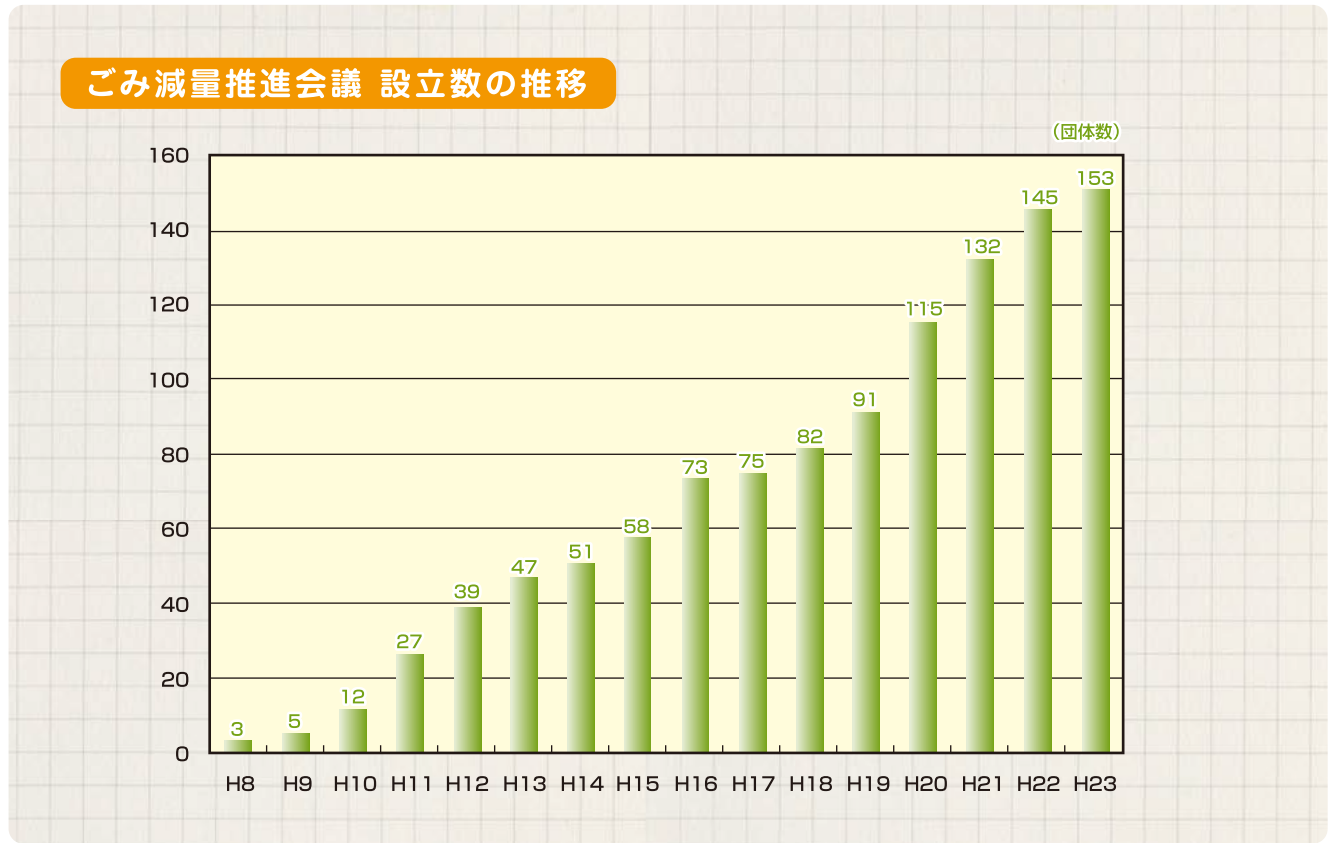
地域ごみ減は、小学校区（元学区を含む）を基本単位に、自主的に組織された団体であり、各地域において、それぞれの地域や団体の特性にあったかたちで、ごみ減量やリサイクルの取組が行われています。

京都市ごみ減量推進会議（以下「京都市ごみ減」）では、市内に220ある小学校区（元学区を含む）すべてに地域ごみ減を立ち上げることを目標にしています。

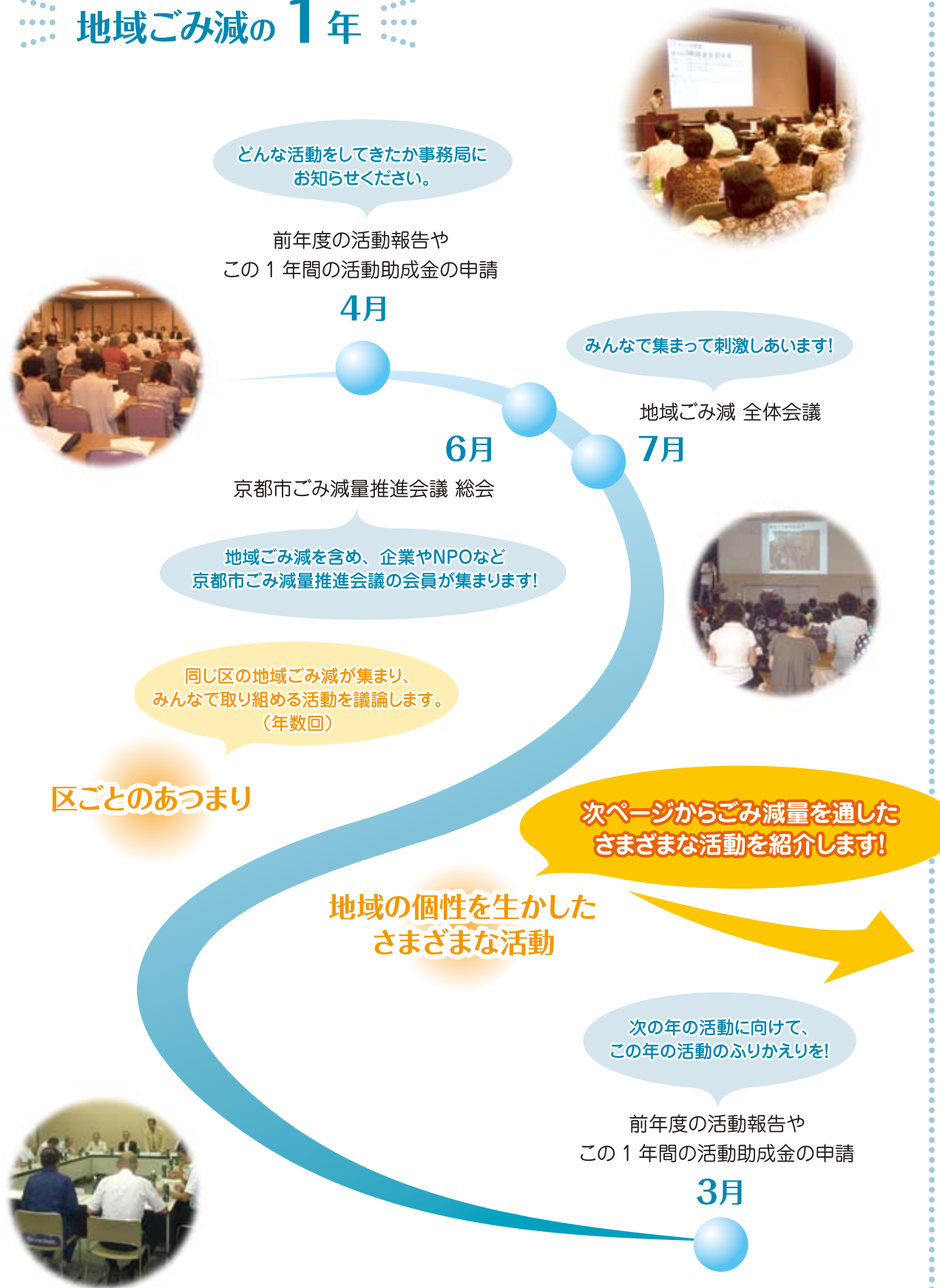
- 地域ごみ減を立ち上げ、活動していただくことにより
- 京都市ごみ減からの活動助成金（22 ページ参照）により、地域の実情や課題に応じたごみ減量活動が展開できる。
- 地域でごみ減量に取り組むことでコミュニティの活性化が図れる。
- 活動を通して、地域における環境問題への意識を高めることができる。

などのメリットがあります。

使用済てんぷら油の回収をはじめ、落ち葉等の堆肥化や地域イベントのエコ化、フリーマーケットなどの取組、施設見学会や環境学習会など実に様々な活動が行われています。



地域ごみ減の1年



資源と一緒に みんなの笑顔も集まって！

使用済てんぷら油をはじめ、蛍光管や乾電池の回収まで、地域を巻き込みながら、それぞれのアイデアと工夫で資源物回収に取り組む 2 つの地域ごみ減量推進会議をご紹介します。

取組紹介1

『お買い物ついでに てんぷら油も忘れずに！』

山階学区地域ごみ減量推進会議（山科区）

毎週火曜日の午前中、マツヤスーパー山科三条店の店先は、ペットボトルや牛乳パックを持った買い物客で賑わいます。「おはようございます。」「いつもご苦労さま。」挨拶が飛び交う風景もすっかりお馴染みとなりました。

地域のスーパーと一緒に

山階学区地域ごみ減量推進会議（以下、山階ごみ減）の立上げは平成 17 年。当初は役員の自宅の軒先や団地内で使用済てんぷら油の回収をしていましたが、協力者が限られており、回収量も伸び悩んでいました。そこで、「日常的に食料品などを買い求める主婦層をターゲットに、スーパーの店頭での回収ができないか」との発想が湧き、早速マツヤスーパーに相談に行きました。

人から人へ

マツヤスーパーでは、責任者の理解と協力を得ることができ、平成 18 年から使用済てんぷら油の回



入れやすく工夫されたポリタンク

収が始まりました。利便性が高く、多くの市民が訪れる場所での呼びかけには、思いのほか反響があり、山階ごみ減の伊藤会長をはじめ、この活動に積極的に参与された自治連合会の住友会長も嬉しい驚きでいっぱいでした。回収量はぐんぐんと伸び、今では 1 ヶ月間でドラム缶 1 杯分もの回収実績を誇ります。一人ひとりの、少しずつの意識の変化が大きな成果に結び付くことを教えてくれます。

お互いの思いやりに感謝して

この活動の成功は、暑い日も寒い日も、店先で回収のお手伝いをしてくださる地域の方々の継続的な協力なくしては語れません。伊藤会長と住友会長の 30 年以上にもわたる熱い友情が、地域の人々の心をつにしているとも言えます。困った時はお互い様。この思いやりの気持ちが、多くの市民を自然に巻き込む、環境活動の第一歩となるのではないのでしょうか。

取組紹介2

『地域のつながりを 資源の回収にも活かして』

有隣学区ごみ減量推進会議（下京区）

毎月 11 日は資源物回収の日。下京区にある有隣学区ごみ減量推進会議（以下、有隣ごみ減）では、ビールびんや蛍光管など、家庭から出る不用品を“資源”として積極的に集める取組を続けています。

忙しい人にも参加してほしい

有隣ごみ減の資源物回収は、午前 10 時から 12 時までと、午後 7 時から 8 時 30 分までの、昼と夜とに分けて行われています。「昼間にお勤めの方が利用しやすいように」と、働く世代への配慮も忘れません。平成 23 年度からは「下京ごみ減量ポイントカード」を導入し、資源物回収に協力してくれた方にお楽しみポイントを渡すだけでなく、どれくらいの方がどれくらいの頻度で活動に参加してくださっている



スタンプをポン！

のか調査も始めました。すると、面白いことが分かってきました。

広がる人の環

「これまでは、毎回同じ方が回収に協力してくれていると思っていたんですが、統計を見ると新しい方が随分と多いことに驚きました。それも月を追うごとに増えており、資源物回収の環が広がっていることを実感しています。」と、有隣ごみ減の大田垣会長。廃校となった元学区の小学校は回収拠点として活用され、地域のコミュニケーションの場所としても大切な役割を果たしています。夏祭りやサークル活動など、日々の生活の中で育まれた人と人との温かいつながりが、月に 1 度の回収日を賑やかなものになっています。

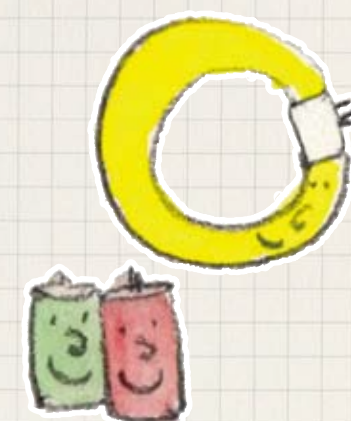


回収の様子

活動のポイント

- 資源物の回収拠点は、多くの人が利用しやすい場所が最適（小学校や公共施設、スーパーなど）。
- 回収日の周知、回収方法の呼びかけには、地域の掲示版や回覧板を活用する。
- 回収当日は、地域の方との交流を楽しみながら、無理なく継続できる体制を整える。

※京都市では、使用済てんぷら油やコミュニティ回収などの助成を行っています。詳しくは P22 をご覧ください。



食 べ る こ と か ら 環 境 意 識 を 高 め よ う

夏祭りや年末のもちつき大会など、季節毎の地域の催しは、大勢の家族連れで賑わいます。そんなイベントでも一工夫。リユース食器を活用した取組事例をご紹介します。

取組紹介1

『食器と一緒に ごちそうさま!』

藤城学区地域ごみ減量推進会議（伏見区）

子どもたちが楽しみにしている夏祭り。屋台からは焼きそばなどの香ばしい匂いが漂います。これまで、食べ物を入れるお皿は使い捨て容器がほとんどでしたが、環境に配慮したイベントが広がる中、藤城学区地域ごみ減量推進会議（以下、藤城ごみ減）でも平成22年度からリユース食器の導入を始めました。

取組の第一歩は、仲間への呼びかけ

リユース食器を使用する際に、必ず問題になるのが「誰が食器を洗うのか」という点です。藤城ごみ減では、日頃のネットワーク



を活かして、お祭りに参加する各団体に協力を呼びかけました。すると、「少しでもみんなのためにお手伝いできれば」と、気持ち良く協力してくれる方が集まり、洗浄作業も随分と活気あるものになりました。更に、みんなからの感謝を受け、スタッフにも充実感が広がりました。

「地域のイベントは、しんどいことだけでは絶対には続きません。スタッフみんながイベントに参加して楽しかった、また来年も参加したいと思って頂ける運営を目指しています。」廣澤会長をはじめ、藤城ごみ減の活動姿勢が伺えます。

美味しく食べたら、きれいに洗ってごちそうさま!

次の課題は、「水資源をいかに節約できるか」という点。食器を洗浄するための水や洗剤をいかに少な



くできるかが腕の見せ所です。そこで登場したのが「おがくず」。食器に残った油分や食べかすを「おがくず」でふき取ることで、水の使用量を大幅に減らすことができました。スタッフが食器をきれいにしているのを見て、子どもたちも熱心に手伝ってくれました。使用後のおがくずは、藤城小学校内の堆肥施設に入れられ、リサイクルされます。

広がる活躍の場

「京都市認定エコイベント」に指定された夏祭りの他にも、「藤城歩こう会」や少年補導委員会が主催の「もちつき大会」などでもリユース食器が大活躍。今後も、リユース食器の種類を充実させ、イベントの規模や内容に

対応できる体制にしたい、と藤城ごみ減の夢は膨らまばかりです。



取組紹介2

『食器を洗う手間を地域の絆にかえて』

梅逕安心安全ネットワークごみ減量推進会議（下京区）

元梅逕中学校を拠点に活動続ける梅逕安心安全ネットワークごみ減量推進会議（以下、梅逕ネットワークごみ減）では、年間を通じて、リユース食器を活用したユニークなイベントを多数行っています。

お祭りのごみを減らしたい

多くの人で賑わうイベントでは、手間のかかることは避けたいもの。しかし、気軽に使い捨て容器を使うほど、ごみ箱はプラスチック容器で溢れ、かさ張るごみの処理が主催者の大きな負担となっていました。そんな中、「リユース食器」を導入することで、ごみの量は激減。その実績が注目を集め、地域全体でリユース食器に対する関心が高まっていきました。

地域の期待に応えて

梅逕ネットワークごみ減では、リユース食器をもっといろんな人に役立ててもらおうと、近隣の小学校や関係団体への貸出を行っています。当初は、リユース食器の使用に対して衛生面を不安視する声もありましたが、貸出先のPTAから「私たちがきれいに洗

いますから!」との力強い申し出もあり、また使い捨て容器のように破損して火傷をするといった危険性も低いため、今では地域のイベントで大活躍をしています。リユース食器の導入を通して、梅逕ネットワークごみ減と地域とのつながりはより親密になりました。今後も、助成制度*などをうまく活用してリユース食器の利用促進に努めたい、と梅逕ネットワークごみ減の加藤会長は意気込みを語ってくれました。



活動のポイント

- イベントなどでのごみ減量には、リユース食器の導入は非常に効果的です。その際、食器を借りる、若しくは購入する費用があるかどうか、また食器の洗浄や管理の人手や場所を確保できるかどうかを検討する必要があります。
- リユース食器を使用する他に、イベント時に自宅からタッパーやお箸の持参を呼びかけることで無駄な資源の消費を抑えることができます。できることからイベントのエコ化に取り組みましょう。

※リユース食器の助成制度についてはP22をご覧ください。



落ち葉堆肥がつなぐ地域のコミュニケーション

京都市内の小学校では、校庭などで集めた落ち葉を堆肥にする取組が盛んに行われています。落ち葉の堆肥化を通して、小学校と地域のつながりがより深まった二つの例をご紹介します。

取組紹介1

『落ち葉をみんなの財産に!』

朱雀第六学区地域ごみ減量推進会議（中京区）

朱六の森をはじめ、緑豊かな朱雀第六小学校では、中京エコまちステーションからの呼び掛けによって、平成22年秋から落ち葉の堆肥化に取り組んでいます。

学校ぐるみでスタート

「子どもたちと一緒に、環境に良いことにどんどん挑戦したい。」校長の小椋先生自らがこの活動に理解を示し、管理用務員の井上さん、更には朱雀第六学区地域ごみ減量推進会議の中上会長の協力を得て、校舎の東側に落ち葉堆肥作りの場所を設けました。ブロックと木製の仕切り戸で作られた堆肥ボックスは井上さんの手作り。毎日様子を見ながら、週に1度はボックス内の堆肥をかき混ぜる作業にも余念がありません。



堆肥をかき回す様子

子どもたちが主役

落ち葉の堆肥化は、まず子どもたちに落ち葉を集めてもらうことから始まります。「松の葉は堆肥になりにくいから、広葉樹の葉っぱだけを集めてね。」井上さんや担任の先生方の熱心な指導で、子どもたちはどんな木の葉が堆肥に適しているかをしっかりと学習しています。掃除時間の後、大きなビニル袋いっぱいに落ち葉を集めた子どもたちは、堆肥ボックスに運び込み、約半年間、落ち葉がじっくりと堆肥になるのを



できた堆肥を畑で活用

待ちます。微生物の働きによって分解された良質の落ち葉堆肥は、翌年の春には校内の畑の堆肥として使われました。

堆肥作りから自分たちが関わり、一生懸命育てて収穫した野菜の味は正に格別!この達成感や満足感が、食べ物や生き物を大切にすることを育むことにつながっていくのですね。

広がる可能性

朱六小学校では、地域の方々が定期的に校庭の掃除をしてくださったり、児童たちと一緒に畑の草引きをしたりと、年間を通して密接に交流を続けています。中上会長をはじめ、地域ごみ減の皆さんも積極的に環境学習をサポートし、小学校と地域の架け橋として活躍されています。今後は、小学校で作られた落ち葉堆肥を地域の公園の花壇などでも活用するなど、地域の財産としての堆肥化の取組に期待が高まります。



左から、中上会長、小椋校長先生、井上さん

取組紹介2

『落ち葉からたくさんのことを学びながら』

朱雀第四学区地域ごみ減量推進会議（中京区）

これまで朱雀第四小学校では、校内の畑の一角に落ち葉の堆肥ボックスを設置し、畑やピオトープの堆肥として活用してきました。平成23年度からはこの取組が更に本格化し、先生方の指導の下、より多くの堆肥作りに挑戦しています。

学校をあげて堆肥化に挑戦

二つある堆肥ボックスには広葉樹の葉や小さな枝をはじめ、何と古い畳までもが入れられ、堆肥となる日をじっと待っています。できあがった落ち葉堆肥は、栽培委員（小学5・6年生）や大学生のボランティアの協力によって畑に撒かれ、栄養豊富な土として再び生命を育みます。また、「しまみみず」を使った、給食調理場から出た野菜くずの堆肥化にも実験的に取り組んでおり、学校全体に環境への取組が浸透しています。



堆肥ボックスの様子



この中で「しまみみず」が働いています!

この小学校では堆肥化の他にも、ピオトープ「あかしやの森」での環境学習や紙屋川での清掃活動など、地域の方とのふれあいが多くのも特徴です。また、全校児童が、動植物の世話を通して自然と触れる機会が多いことも貴重な体験につながります。

地域のサポートが充実

このような環境学習の推進には、地域の方の協力が不可欠です。朱雀第四学区ごみ減量推進会議の田中会長は、「子どもたちの豊かな成長のためには、学校と家庭、地域が一体となって、みんなで子どもたちの教育をサポートすることが大切だ」と熱く語ってくれました。子どもたちとの環境活動が、地域の安心・安全にもつながる、そんな確信が会長の目には溢れていました。

活動のポイント

- 落ち葉の堆肥化は、においも少なく、虫が湧く心配も少ないため管理がしやすい。
- 子どもたちと地域の方が、一緒に落ち葉を集め、堆肥の状態を見守る活動ができるため、会話の場としての効果が期待でき、環境学習にも繋がる。
- 自分たちで作った堆肥の活用方法を話し合うことで、更なる環境改善やごみ減量に結び付けることができる。



※新たに堆肥化に取り組む市民団体には、京都市からの助成が受けられる場合がありますので、詳しくは P22 をご覧ください。

環境教育の最前線 ～地域の役割を考える～

京都市内の小学校では、その地域の特徴を活かした環境学習が盛んに行われています。その中でも、地域ごみ減量推進会議が大きな役割が担っている取組をご紹介します。

取組紹介1

『子どもも大人も大きな目標に向かって』

醍醐西地域ごみ減量推進会議（伏見区）

醍醐西小学校では、平成 22 年度から年間を通じてユニークな環境学習が行われています。その名も「醍醐西 e～na(えーな) プロジェクト」。醍醐西地域ごみ減量推進会議（以下、醍醐西ごみ減）の発案で、地域と小学校、醍醐エコまちステーションが協力し、地域清掃で集めた落ち葉を堆肥にして、4 年生はカブトムシを、5年生は野菜を育てよう!という夢いっぱいのプロジェクトです。

教室から駆け出そう!

このプロジェクトは、3 年生の秋に、子どもたちが森の宝物である落ち葉の役割や自然の循環の仕組みについて学



ぶことから始まります。そして、地域の皆さんのサポートのもと、学区内の落ち葉を集め、堆肥ボックスに運びます。この堆肥ボックスはなんと地域の方の手作り。子どもたちは、実際に身体を動かしながら落ち葉堆肥作りを学んでいきます。地域の皆さんの智慧と経験が、子どもたちに受け継がれる貴重な時間です。

落ち葉堆肥からカブトムシが誕生

約半年間を経てできた良質の落ち葉堆肥は、カブトムシの幼虫にとって居心地のいいベッドです。苦労して作った堆肥で育ったカブトムシが、羽化した時の



子どもたちの嬉しそうな表情!

23 年 8 月には、子どもたちが門川市長のもとを訪れ、堆肥で育て

たカブトムシと野菜、そしてカブトムシのことを調べてつくった「カブトムシ新聞」をプレゼントしました。これは、2 月に授業の様子を見て、子どもたちを激励された市長へのお礼でした。

創意工夫の面白さを子どもたちへ

このプロジェクトでは、教科書だけでは学べない命の循環を体験することができます。醍醐西ごみ減の吉村会長をはじめ、地域の皆さんは、子どもたちがこれらの体験から学んだことを、毎日の暮らしの中にもどんどん活かして欲しいと願っています。

世代を越え、創意工夫の面白さや生活の智慧が受け継がれていくこと、これが地域を交えて環境学習を行うことの大きな意義ではないでしょうか。



取組紹介2

『地域のネットワークを活かして』

室町地域ごみ減量推進会議（上京区）

「児童館でも環境学習に取り組みたい。」室町児童館の楠館長と、室町地域ごみ減量推進会議の織田会長の熱い想いから、新しい形の環境学習が実現しました。教育機関・地域・行政との連携によって、子どもたちに良質な体験を届けることができた取組をご紹介します。

小学校の低学年を対象に

この環境学習は、児童館学童クラブの小学 1～3 年生を対象に行いました。小学校での環境学習は、通常小学 4 年生の授業で行われるため、この点でも児童館での取組の先進性が伺えます。当日は、約 50 名の児童が集まり、初めての雰囲気みんなドキドキ、何が始まるのかと興味津々でした。

この日の講師は、環境教育プランナーの澤田智茂さん。京エコロジーセンター等でも環境教育講座を



行い、あっと驚くアイデアと楽しいお話で子どもたちにも大人気の先生です。この環境学習に参加しようと、楠館長や織田会長をはじめ、上京エコまちステーションの職員も参加。澤田先生から「環境問題っていうのは、お互いの“関係”を大切にすることなんだよ。」と教わった子どもたちからは、「また児童館に来て!」という嬉しい声が聞かれました。

立場を超えて子どもたちのために

この環境学習は、織田会長から講師の相談を受けたエコまちステーションが、京エコロジーセンターを介して講師を紹介したことで実現しました。織田会長の環境教育への熱意が様々な団体をつなぎ、子どもたちの学習環境を向上させることになりました。立場を超え、お互いが協力し合える地域を築くこと、それが織田会長の願いです。

活動のポイント

- 地域の小学校や児童館の子どもたちや教職員、保護者と、悩みや情報を共有できる機会を作る（地域の祭りや運動会、バザーなど）。
- ごみ減量活動を子どもたちと一緒に行うことで、環境について学ぶ機会を増やすことができる。

※環境学習に関するご相談は、地域のエコまちステーション、京エコロジーセンターまでお問い合わせください。問い合わせ先は P22 又は裏表紙をご覧ください。



今こそ、活動範囲を広げよう！～各区ごみ減量推進会議の取組～

これまで地域ごみ減量推進会議では、^{もとがっく}元学区単位でのごみ減量活動を積極的に行ってきました。それぞれの学区で一定の成果が出る中、更なる活動の可能性を探りながら、区単位で新たな取組に挑戦している先進的な事例をご紹介します。

取組紹介1

『レジ袋いりまへん!の声を増やしたくて』

北区地域ごみ減量推進会議（山本玉幸会長）

京都市北区は、市内全行政区の中で、最も店舗でのレジ袋の無料配布の中止（有料化）が進んでいます。現在 13 団体ある地域ごみ減で構成されている北区ごみ減量推進会議（以下、北区ごみ減）では、平成 22 年度に「『レジ袋いりまへん!』で、もっと減らそう!キャンペーン」に取り組みました。これは、事業者、市民団体、そして行政が連携することで実現。北区ごみ減は、主にレジ袋の有料化を実施している店舗での PR 活動を担当し、先進地区として注目を集めました。

学習会を通して

このレジ袋削減キャンペーンを行うにあたり、北区ごみ減の皆さんは、北区エコまちステーションや京都市ごみ減量推進会議と連携して、レジ袋学習会を開催しました。家庭から出るごみの中に含まれるレジ袋の割合や、その処理費用など、レジ袋に関する‘もったいない’現状を詳しく学習。「レジ袋はタダじゃない、限りある資源を有効に活用しなければ」との認識を、改めて強くしました。



レジ袋学習会の様子



大勢の人で賑わう「北区 ECOまつり」

市民と事業者の架け橋に

北区ごみ減では、4 日間のキャンペーン中に、合わせて 9 店舗 * でマイバック持参を呼びかける PR 活動を展開し、3000 人以上の方に声をかけました。その姿に、キャンペーン参加店の皆さんも、大いに力を受けたそうです。京都市内のレジ袋の消費量は年間約 3 億枚とも言われ、その削減にはこうした市民からの働きかけが不可欠です。

大きな発信力を活かして

このキャンペーンの翌年、北区ごみ減では「北区 ECOまつり」を開催、区単位での活動を続けています。今後も、容器包装の削減を目指す北区ごみ減。北区から全区へ、いつもマイバックを持ち歩くライフスタイルを定着させるため、活動の意義は高まるばかりです。

※京都市のレジ袋削減協定に参加し、レジ袋の無料配布を中止しているスーパーチェーン店（全 5 社 33 店舗）の中から、北区にある店舗で実施。

取組紹介2

『その生ごみ 捨てる時にはひと工夫!』

右京区地域ごみ減量推進会議（菊池初江会長）

右京区ごみ減量推進会議（以下、右京区ごみ減）では、現在 22 団体の地域ごみ減が連携し、生ごみの水切りの徹底を広く市民に呼びかけています。家庭ごみの約 40% を占める生ごみ。これらの水分を減らすことで、大幅な減量化、更には焼却時のエネルギー削減にもつながります。

人から人へ、想いも届けて

右京区ごみ減では、右京エコまちステーションの協力を得て、生ごみ処理についての理解を深めるために施設見学ツアーを行ったり、区内のイベント会場など 9 カ所にて、水切りネットを配布しながら、使用方法や効果についての

説明を行いました。この他、右京区ごみ減を中心に、様々な機会を利用して生ごみの水切りの必要性を伝える啓発活動を実施しています。

自分たちで意見を出し合いごみの減量に取り組む右京区ごみ減。生ごみを乾燥させることで嫌なにおいも激減。ごみ出しのマナー向上にもつながると期待されています。



生ごみの水切りって大切なんだよ

取組紹介3

『大掃除の後は 資源物回収ですっきり!』

伏見区地域ごみ減量推進会議（村瀬克子会長）

年末の大掃除の時期に、伏見区ごみ減量推進会議（以下、伏見区ごみ減）では使用済めんぷら油や蛍光灯、乾電池などの資源物回収を行いました。年末は、特に資源物の回収率が高く、伏見区ごみ減の活動の PR にも繋がるため、地域の一斉清掃やバザーなどに合わせて実施されました。

環境意識の高まりとともに

資源物回収は、回収場所や回収時間が学区によって異なるため、それぞれの地域ごみ減が主体となり、伏見エコまちステーションが各学区の調整を行うことで実現しました。各学区とも回収量は多く、これらの資源物がリサイクルさ

れ、適正処理されることの意義は大いにあります。回収と併せて、ごみの減量や分別に関する啓発を行うこともでき、市民の皆さんからは「定期的に開催してほしい」との嬉しい声も多数寄せられました。資源物回収を行うにはある程度広いスペースが必要となるため、小学校などとの連携が不可欠です。地域と市民の暮らしをつなぐ伏見区ごみ減の活動は、今後益々注目を集めることでしょう。



イベントでの資源物回収の様子

活動のポイント

- 近隣の地域ごみ減や各区エコまちステーションと情報交換を行い、区全体の課題やニーズを探りましょう。
- 各区ごみ減のミーティングの機会をうまく活用し、連携は広く、実行は各学区単位で積極的に行いましょう。



仲間を増やし より発展的な取組に！

各取組紹介を読んだ少子さんと減蔵さんが公園の清掃活動をしながら会話しています。



しょうこ
少子さん

地域ごみ減の活動については、使用済てんぷら油の回収に参加。その他の活動について興味がある小学生の母親。

げん ぞう
減蔵さん

少子さんの地域の友人(子どもの友達の父親)で、若い頃環境活動の経験有り。PTA会長の経験者。



ここまで、11団体の活動内容を詳しく見ていく中で、たくさんのことに気付いたの。

例えばどんなこと？



まず、資源物の回収活動では、暮らしに密着した場所で定期的に行うことによって、多くの人に無理なく参加してもらえる、ということ。働く世代も参加できるのは、みんなにとっても嬉しいことだと思うの。

なるほど。参加する側の利便性を考えることは、活動を盛り上げるための秘訣だね。一方、活動を支える側、つまり地域ごみ減のメンバーの負担が、同じ人に偏り過ぎないように、地域の他の団体と協力し合うことも活動を長く続けるための工夫だね。



それから、地域の行事にリユース食器を取り入れたエコイベントの成功事例では、主催する大人たちが、子どもたちと一緒に行事を楽しんでいる姿が印象的だったわ。

「楽しさ」は、環境活動の原動力！イベントなどを通して、一緒に地域の行事を盛り上げる仲間が増えるといいね。



それに、施設や備品を、地域みんなで共用する、という考え方も素晴らしいと思うの。個々のイベントで備品を使い捨てるのではなくて、みんなが繰り返し大切に使う、この気持ちが地域のつながりを強くするんじゃないかしら。

本当にその通りだね。自分たちの地域をもっと良くしたい、その気持ちがあれば、少しずつ方法は見えてくるんだね。



減蔵さんが小学生の頃は、自然の中でよく遊んだの？

僕の住んでいた地域には大きな川があったから、夏はそこでよく遊んだし、春や秋には虫取りをしたなあ。



今では自然が少なくなったとは言え、地域の山や川、草木を題材に、一年を掛けて自然の営みや循環を学ぶことはとても大切なことだと思うの。

京都市内の小・中学校では、先生方と地域の人が協力して、実際に自然の中で学ぶ機会を充実させているね。



その他にも、清掃活動や地域の行事などの機会を活用して、落ち葉堆肥を作ったり、野菜を育てたりと、地域ごみ減の活動が学校教育にも活かされているのは本当に嬉しいわ。

日々の活動の中で、もっと深くごみや環境問題について知りたくなったら、京都市ごみ減量推進会議やエコまちステーションに相談すると、専門の講師を招いての学習会や施設見学会など、更にレベルアップした活動を提案してくれるんだ！



地域の課題も共有しながら、他の地域での活動や京都市全体、更には全国の活動事例を学ぶことによって、より発展的な取組につなげることができるのね！ああ、何だかわくわくしてきたわ。私たちの地域でも、いろいろな環境活動の芽が育ち、新しい仲間がどんどん増えるといいなあ！

よくある質問

設立に関する質問

地域ごみ減を設立するとどうなるのですか？

地域でのごみ減量活動に対し、京都市ごみ減量推進会議（以下、市ごみ減）や各区エコまちステーションからさまざまな支援を受けることができます。たとえば「こういった活動をしたいが、どのような方法があるか?」「ごみの現状について知りたいが、調べ方がわからない」「地域に活動を広めていくよいアイデアがないか?」といった課題と一緒に取り組んでいきたいと考えています。

学区にすでに地域ごみ減があります。別に設立することができますか？

地域に根差し、地域でまとまって、ごみ減量活動を行うことを目指しているため、原則「1つの学区に、1つの地域ごみ減」で進めております。ぜひ、今ある「地域ごみ減」に入っただき、一緒に活動してください!

自分の学区に、地域ごみ減があるかどうかは、どうすればわかりますか？

市ごみ減のウェブサイトをご覧ください。市ごみ減又は各区・支所にあるエコまちステーションにお問合せください。

近所で使用済てんぷら油の回収をされている方がいらっしゃいますが、その活動とは別に地域ごみ減を作れますか？

多くの地域ごみ減が、地域での使用済てんぷら油の回収活動を行っていますが、それをされているご近所の方が必ずしも地域ごみ減とは限りません。お住まいの学区に既に地域ごみ減があるかどうか、市ごみ減又は各区・支所にあるエコまちステーションにお問合せください。

活動に対する支援制度はありますか？

地域ごみ減の方々を対象とした活動助成金制度を設けています。（22 ページをご覧ください。）併せて、京都市が行っている様々な活動助成や購入補助などを活用いただくと、活動しやすくなります。

どのような単位で設立することができるのですか？

小学校区（元学区を含む）を基本単位として、設立していただくことができます。地域の各種団体との横のつながりがあると、連携がとれやすいと考えておりますので、自治連合会等を母体として設立いただくよう働きかけています。

地域ごみ減を始めたら、ずっと続けなければならないのですか？

地域や集まった方々により様々な事情があると思いますので、必ず「ずっと続けなければならない」わけではりません。とはいえ、せっかく立ち上げた地域ごみ減がなくなるのはモッタイナイ!立ち上げてから、徐々に仲間を増やし、次世代につなげ、引き継いでくれるメンバーを見つけられれば、最高です。

助成金は何に使えるのですか？

地域でのごみ減量活動に必要な様々なことにご利用いただけます。

市ごみ減からの助成金が、残ってしまった場合は？

予定していた活動内容の変更等で、助成金が残った場合は年度ごとに市ごみ減に返納いただきます。

運営後の質問

地域ごみ減が活用できる！助成制度案内

京都市ごみ減量推進会議では、地域ごみ減を含め、ごみ減量に取り組む市民活動をサポートするため、様々な助成制度を設けています。また、ごみ減量活動に関連して利用できるその他の助成制度についても紹介します。

市ごみ減の助成制度

※その他、助成内容や助成対象、条件についてはお問合せください。

助成・活動支援制度	内容	助成対象団体・活動
地域活動助成金	小学校区を基本として地域住民の皆様により組織される「地域ごみ減」が行うごみ減量活動を支援するための助成です。 ◎設立3年目まで 年間5万円 設立4年目以降 年間2万5千円	地域ごみ減の活動
地域ごみ減の行政区及び支所単位での活動助成金	行政区及び支所を単位として複数の地域ごみ減が、合同でごみ減量活動を行うための助成です。 これまでの活用例：施設見学会、環境イベント ◎年間10万円	各区ごみ減行政区及び支所を単位として、複数の地域ごみ減が合同で行う活動
市民公募型パートナーシップ事業助成金	京都市内のごみ減量につながる取組で循環型社会の実現に資する事業に対して助成しています。 例年 5 月に募集を行い、審査の上、助成の可否を決定します。	京都市内に活動拠点のあるごみ減量活動を行う市民団体（法人格の有無は問わない）

その他の助成・活動支援制度

※その他、助成内容や助成対象、条件についてはお問合せください。

助成・活動支援制度	内容	問合せ先
リユース食器助成金制度	地域団体や NPO などの団体が京都市内で開催し、100 食以上の飲食品を提供するイベントを対象に、リユース食器レンタル費などを助成しています。	循環企画課（電話 213-4930）/ 各区・支所のエコまちステーション
コミュニティ回収助成	古紙や古着などの資源を地域で定期的に回収する活動に対し活動費を助成しています。	各区・支所のエコまちステーション（連絡先は裏表紙に記載）
使用済てんぷら油回収助成金	使用済てんぷら油を地域で定期的に回収する活動に対し必要な資材の提供と活動費を助成しています。	
堆肥化活動助成	生ごみ・落ち葉などの堆肥化の活動を行う団体に対し、堆肥化の活動に必要な材料・工具等の購入費を助成しています。	
エコバスツアー	環境に関心のあるグループ・団体であれば、クリーンセンターや京エコロジーセンターなどの施設見学ツアーを組んでもらえます（参加費無料）。	京エコロジーセンター（電話 641-0911）
京エコロジーセンター環境保全活動助成	地球温暖化防止や循環型社会の実現に向けた環境保全活動を対象に助成をしています	

この他にも、京都市内外に様々な活動助成がありますので、活用してみましょう！

この冊子に関する お問合せは

京都市ごみ減量推進会議

電話：075-647-3444 FAX：075-641-2971

京都市伏見区深草池ノ内町13京エコロジーセンター活動支援室内



この冊子の内容は、京都市ごみ減量推進会議のウェブサイトから
ダウンロードできます。

京都市ごみ減量推進会議

検索



京都市のごみに関するお問合せ・ご相談

- 北エコまちステーション（北区役所 2 階） 電話：075-366-0155 FAX：075-366-1372
- 上京エコまちステーション（上京区役所 2 階） 電話：075-366-0776 FAX：075-366-1373
- 左京エコまちステーション（左京区役所 2 階） 電話：075-366-0821 FAX：075-366-1374
- 中京エコまちステーション（中京区役所 1 階） 電話：075-366-0180 FAX：075-366-1375
- 東山エコまちステーション（東山区役所 2 階） 電話：075-366-0182 FAX：075-366-1376
- 山科エコまちステーション（山科区役所 1 階） 電話：075-366-0184 FAX：075-366-1377
- 下京エコまちステーション（下京区役所 1 階） 電話：075-366-0186 FAX：075-366-1378
- 南エコまちステーション（南区役所 1 階） 電話：075-366-0188 FAX：075-366-1379
- 右京エコまちステーション（右京区役所 1 階） 電話：075-366-0190 FAX：075-366-1380
- 西京エコまちステーション（西京区役所 1 階） 電話：075-366-0192 FAX：075-366-1381
- 洛西エコまちステーション（洛西支所 1 階） 電話：075-366-0194 FAX：075-366-1382
- 伏見エコまちステーション（伏見区役所 1 階） 電話：075-366-0196 FAX：075-366-1383
- 深草エコまちステーション（深草支所 1 階） 電話：075-366-0198 FAX：075-366-1384
- 醍醐エコまちステーション（醍醐支所 2 階） 電話：075-366-0311 FAX：075-366-1385

● 企画編集：京都市ごみ減量推進会議

● 執筆：松村香代子

● イラスト：横山宇加

● デザイン：西村元哉（graphic design House-A）

平成 24 年 3 月発行